

令和6年度文化庁委託事業

**令和6年度「文化財関連用具・原材料調査事業
(工芸技術)」にかかる調査研究業務**

研究・成果とりまとめ報告書

令和7年3月

近畿日本ツーリスト株式会社

第 1 章.はじめに.....p.2

第 2 章.調査研究業務における公募に関して.....p.3

第 3 章.実施団体の調査研究.....p.6

第 4 章.保持団体・保存団体へのアンケート実施.....p.13

総括..... p.18

1. 本事業の背景と目的

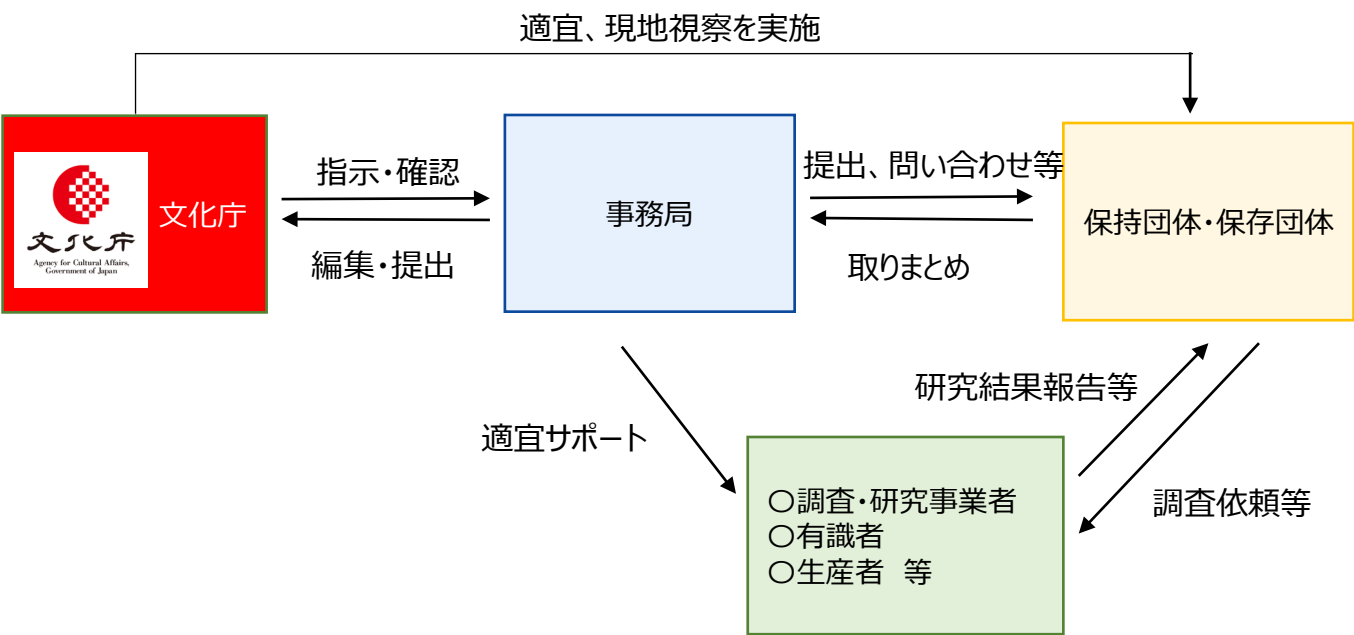
文化庁は、文化財の保存に必要な技術を選定保存技術に選定し、その保持者及び保存団体を認定することにより、当該技術の保護を図っている。

しかしながら、近年の社会構造や生活環境等の変化によって、技の保存・体現のために欠かせない伝統的な技術を支える用具・原材料の確保が困難になっている。「文化財関連用具・原材料調査事業（工芸技術）」（以下、「本事業」という）は、無形の文化財のうち特に工芸技術分野において、それらの用具・原材料の持続的な供給を確保するため、各団体等が技の体現や錬磨のために欠かせない用具・原材料についての調査、研究を通じて量的・質的な維持のために必要な活動を行い、以て当該の用具・原材料、ひいては技そのものの保存・継承を目的とした事業である。

本業務においては、上記に掲げた本事業の円滑な実施のための支援を行うとともに、事業支援を通じて、円滑な事業実施のために必要な作業・活動について調査、分析を行い、以て各団体等が効率的かつ効果的な調査研究を主体的にできるような事例を収集することを目的とする。

2. 本事業の全体像

本事業では、重要無形文化財保持団体および選定保存技術保存団体において、用具・原材料に関する諸課題の調査研究の実施に関する業務を採択し、文化財継承のための事例をケーススタディとして整理・分析を行い、研究・成果とりまとめとする。



第2章 調査研究業務における公募に関して

1. 募集団体の一覧

「工芸技術関係の、重要無形文化財保持団体並びに選定保存技術保存団体の事務局に募集を行った。

※赤枠が、今年度採択団体

番号	団体種別	分野	団体名	所在する都道府県
1	重要無形文化財保持団体	漆芸	津軽塗技術保存会	青森県
2	重要無形文化財保持団体	染織	越後上布・小千谷縮布技術保存協会	新潟県
3	重要無形文化財保持団体	染織	本場結城紬技術保持会	茨城県
4	重要無形文化財保持団体	手漉和紙	細川紙技術者協会	埼玉県
5	重要無形文化財保持団体	手漉和紙	本美濃紙保存会	岐阜県
6	重要無形文化財保持団体	手漉和紙	越前生漉鳥の子紙保存会	福井県
7	重要無形文化財保持団体	染織	伊勢型紙技術保存会	三重県
8	重要無形文化財保持団体	手漉和紙	石州半紙技術者会	島根県
9	重要無形文化財保持団体	染織	重要無形文化財久留米絰技術保持者会	福岡県
10	重要無形文化財保持団体	陶芸	小田焼技術保存会	大分県
11	重要無形文化財保持団体	染織	喜如嘉の芭蕉布保存会	沖縄県
12	重要無形文化財保持団体	染織	久米島紬技術保持団体	沖縄県
13	重要無形文化財保持団体	染織	宮古上布保持団体	沖縄県
14	選定保存技術保存団体	漆芸	日本うるし掻き技術保存会	岩手県
15	選定保存技術保存団体	染織	昭和村からむし生産技術保存協会	福島県
16	選定保存技術保存団体	その他	浮世絵木版画彫摺技術保存協会	東京都
17	選定保存技術保存団体	染織	(一財) 日本民族工芸技術保存協会	東京都
18	選定保存技術保存団体	金工	(公財) 日本美術刀剣保存協会	東京都
19	選定保存技術保存団体	漆芸	日本文化財漆協会	東京都
20	選定保存技術保存団体	漆芸	金沢金箔伝統技術保存会	石川県
21	選定保存技術保存団体	染織	日本竹箴技術保存研究会	京都府
22	選定保存技術保存団体	染織	阿波藍製造技術保存会	徳島県
23	選定保存技術保存団体	手漉和紙	全国手漉和紙用具製作技術保存会	高知県
24	選定保存技術保存団体	金工	(合同会社) 伝統工芸木炭生産技術保存会	岡山県
25	選定保存技術保存団体	染織	琉球藍製造技術保存会	沖縄県
26	選定保存技術保存団体	染織	宮古苧麻績み保存会	沖縄県

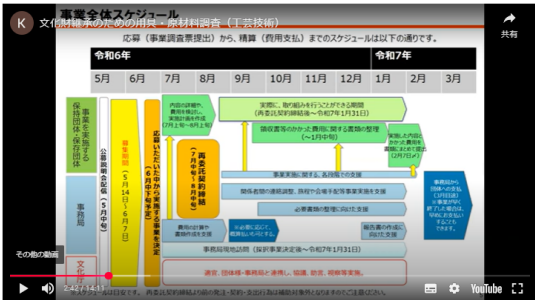
※保持団体・保存団体の一覧（工芸技術部門）
※保持団体・保存団体別に都道府県順に記載しております。

2. 本事業における募集方法

2-2.公募説明会の実施

公募要領の内容理解向上のため、公募説明会を実施し、アーカイブ動画を応募団体に展開を行った。

公募要領説明動画



令和6年度文化財継承のための用具・原材料調査（工芸技術）運営事務局
〒101-0024 東京都千代田区神田和泉町1-13 住友商事神田和泉町ビル13階
TEL：03-6891-9305（平日10:00～17:00）
メール：ecc5-08@orikont.co.jp
本事業は、文化庁からの委託を受け近畿日本ツーリスト株式会社運営しています。

2-3.募集における告知について

本事業における採択団体の募集業務としては、公募用のWEBサイトを作成し、団体が任意のタイミングで確認、十分に理解できるような内容とした。



募集期間

募集期間
令和6年5月14日(火)～令和6年6月7日(金)17:00(必着)

ご案内

事業趣旨

重要無形文化財の保持団体や鑑定保存技術の保存団体が、わざの伝承や伝承者養成に必要な用具・原材料に関する課題への認識発見、解決に主体的に取り組むことができる委託事業です。
本事業の特徴として、団体自らが抱える課題への取り組みを行う中で起こる各種事務作業について、文化庁が委託する事務支援事業者に相談、支援を受けながら事業を進めることが出来るようになっています。

例えば、・・・

- ・ 原材料生産者の生産現場へ訪問したい
⇒ 採掘の作成、会員の旅費の精算、協議場所の設定、現場での記録・・・
- ・ 技術者、生産者など、関係者の間で情報交換をしたい
⇒ 関係者への謝金、旅費の支払い、情報交換会場の設定、記録・・・
- ・ 試作品を評価・分析してもらいたい
⇒ 分析機関への依頼、発注、支払、報告書への載せ方・・・

→ こういった取り組みの中で起こる事務作業の相談、支援を行います。

鑑定スケジュール

日付	スケジュール
5月14日(火)	公募申請開始
5月中旬	事業概要説明動画の公開（アーカイブ配画）
6月7日(金)	公募申請締め切り
6月下旬	採択事業の決定通知

※応募団体における審査については、有識者委員会を設置し、書面による厳正な審査の結果、団体を採択した。

1. 実施団体の調査研究

本成果とりまとめは、これから無形文化財としての工芸技術に関して、文化財の保存・活用に取り組もうする方々が、参考とする事例を抽出することができるように、各事例の効果や、対象、内容、取組主体、手法を事例ごとに整理しています。

また、各事例の紹介ページでは、下記の通り、各取組の概要・取組の経緯・取組により生まれた効果等を紹介しています。

1

事例03

金沢金箔伝統技術保存会 -選定保存技術保存団体-

2

1-2. 漆芸部門

3

多くの選定保存技術団体で原材料や道具の入手が困難になりつつあるが、各選定保存技術団体が解決のための情報を共有する機会がない状況のため、この現状を打破するため、各団体が抱える原材料・道具に関する問題を他団体と共に提起・考察することで新たな視点で解決策を見出すことを目標とする。
今年度は、「原材料・道具」をテーマに定め情報交換・共有を実施し、団体間の交流を広げて原材料の確保や活用に繋げる。

4

-取組- 令和6年度「選定保存技術情報交換事業」実施業務

5

第一部 オンラインワーキンググループ
「原材料・道具」をテーマにオンライングループワークを行い、選定保存技術保存団体から20団体が参加した。以下の通り各グループからは様々な意見が上がり、11月の対面グループワークに繋がる内容となった。
・原材料の枯渇や代替品の難しさ、技術継承や資金調達の課題が議論され、保存会の活動を広く認知させる必要性が指摘された。後継者不足の観点から、若手募集にはSNS活用や保存会同士の協力が有効との意見もあり、有意義な話し合いとなった。
・各保存会で原材料の入手困難が深刻化しており、樽や杉、楠などの確保が課題となっている。和紙の原料は自家栽培や農家委託で補うが害虫の影響も大きい。道具も職人の減少で製作が難しく、代用品では品質に課題が生じる。後継者育成のため、生活の保障や新たな収入源の確保が求められ、若者の関与とアイデア活用が重要との意見が出た。

6

事業取組後の効果
【各団体との情報交換によるアンケート結果】
今後情報交換会が開催される場合の参加意向：
参加したい 98%
今後の開催方式について、希望するもの：
グループワーク・パネルディスカッション 65%

7

残された課題・次年度以降の取組
今年度事業を経て、グループワーク出た意見およびアンケート結果を元に、次年度以降も引き続き選定保存技術保存団体同士の情報交換会の機会を設けたいと考えている。

■ 各事例紹介ページに記載されている主な内容

- 1

事例番号

各事例に対して、番号振りをしております。
- 2

団体名

選定保存技術を有する団体
- 3

団体の概要及び課題
- 4

取組の事業名
- 5

取組概要

取組全体の概要を写真を交えて記載しております。
- 6

事業取組後の効果

事業実施を経た波及効果 等
- 7

残された課題・次年度以降の取組

※重要無形文化財保持団体である
本場結城紬技術保持会は、視察先との日程調整が合わず、実施不可となった。

宮古上布保持団体 -重要無形文化財保持団体-

1-1. 染織部門

宮古上布は、苧麻糸を原料とする麻織物で、越後上布・小千谷縮と並んで上布の代表的存在といわれている。重要無形文化財「宮古上布」は、苧麻糸手績み、図案・絞り、植物染料による染色、手織り、洗濯・砑打ちの5工程の分業制からなり、宮古上布保持団体では、それぞれ専門の技術者が高度の技術を伝承している。

しかしながら、近年苧麻糸の不足が深刻化し、特に伝承者養成事業では販売を目的としないため、原材料の確保が困難である。補助事業として関連技術事業を実施しているが、必要量の確保には至らないため、技の伝承を継続するための、宮古苧麻績み保存会とも連携した令和6年度宮古上布保持団体苧麻糸関係者会議を実施した。

-取組- 令和6年度宮古上布保持団体第2回苧麻糸関係者会議

島内の関係者として、宮古上布保持団体理事、宮古苧麻績み保存会の役員（三役）、宮古織物事業協同組合の役員、島外から有識者として大学教授・准教授・講師、またオブザーバーとして文化庁調査官、沖縄県主任を招聘し、原材料の問題について関係者会議を開催した。宮古苧麻績み保存会は20年間で延べ887人以上の研修生を育成し、講師も20名ほど輩出している。近年、30代の研修生が増えつつあるが、技術者の高齢化や研修修了後の継続が課題である。初級修了者は中級講習やブーンミ会場で技術を磨くが、継続して糸を製作する人は少ない。

また、苧麻糸の価格向上が績み手の意欲向上に不可欠であり、個人工房や織物事業協同組合では糸の買い取り価格を上げたが依然として績み手の収入は低く、更なる価格向上のためには宮古上布の流通改革やコスト計算が求められる。績み手の収入を上げるためには苧麻糸の品質基準を確立する必要があり、そのためには績み手と織り手のコミュニケーション・情報共有を強化し、栽培環境のデータや完成した苧麻糸の細かなデータを蓄積し、良質な糸の定義を明文化するなどの課題が挙げられた。課題解決のための糸口として、績み手と織り手の意識改革とネットワーク構築が求められる。

また、教育機関と連携し学校や公民館講座などでの出前講座を通じ、未来の担い手育成を目指す。行政との協力で島ぐるみネットワークや「糸績み名人」認定など、技術の継承と振興を図っていく方針である。



宮古苧麻績み保存会松岡副会長の苧麻畑視察



宮古苧麻績み保存会宮国教場の研修視察



宮古上布保持団体第2回苧麻糸関係者会議

事業取組後の効果

この度の第2回苧麻糸関係者会議では、苧麻糸と績み手の増加を最大の課題とし、具体的な対策を議論した。宮古上布流通の構造改革が不可欠であり、関係者全員の情報共有と意識改革が鍵となる。

残された課題・次年度以降の取組

- ①糸価格の向上
- ②績み手と織り手のコミュニケーションの場の提供
- ③苧麻の栽培についてのデータを蓄積し、戦略的に良い品質にしていく。
- ④良質な糸の条件を集約していく。
- ⑤績み手が経験的に持っている知識の明文化
- ⑥客観的にわかりやすい合理的な評価基準

事例
02

日本民族工芸技術保存協会 -選定保存技術保存団体-

1-1. 染織部門

日本民族工芸技術保存協会では、古くから代表的な植物染料である紅および紫の原料の紅花と紫根の生産・製造技術を有している選定保存技術保存団体である。本協会は山形県の生産者と紅花栽培、紅餅作りの後継者の確保に努めるとともに、栽培が難しいとされる紫根についても、研究者や栽培家とともに栽培を進めている。

紫根染めは、耐光堅牢度や移染が課題となっているが、秋田県鹿角市には古代紫根染めの技法を用いた90年前の紫根染めが色移りせず鮮やかに保存されていた。調査の結果、古代紫根染め技法の「下染め」（椿灰やサワフタギ灰を120回塗布・乾燥後）、「本染め」（12回染色する）が用いられていた。本研究では、紫根染技法と媒染剤の関係を調査し、成分や効果を検証するとともに、鹿角市での「下染め」技法を学び、貴重な技術を後世に伝えることを目指す。

-取組- 濃い深紫色を染色するための紫根染技法と色移り防止策の研究
(一サワフタギ灰汁とつばき灰汁による先媒染の紫根染技法を分析一)

一昨年12月、当協会はムラサキ栽培調査のため秋田県鹿角市を訪問。今年度、鹿角紫根染・茜染研究会の協力を仰ぎ、色移りを防ぐ「下染め」及び「本染め」の古代鹿角紫根染技法を調査した。関東以西で媒染剤に用いる椿灰に代わって東北地方で用いられているサワフタギ灰の媒染効果を検証し、古代鹿角紫根染めの技法の記録を行った。

鹿角紫根染茜染研究会ワークショップ

- 【1日目】
- ・ 鹿角紫根染・茜染研究会の活動説明
 - ・ 関会長が伝承に取組んでいる古代鹿角紫根染・茜染の説明
 - ・ 椿灰及びサワフタギ灰の灰汁作り
 - ・ 媒染液の説明（サワフタギ灰、大島椿灰、福江島椿灰）比較
 - ・ 下染め作業
- 【2日目】
- ・ 湯通し（下染めが浸透しやすくなる）
 - ・ 染液抽出→本染め（10回繰り返す）
 - ・ 全員で本染め作業体験
- 【3日目】
- ・ 本染めした生地の確認
 - ・ 歴史民俗資料館見学
 - ・ 地元に残る作品について解説



ワークショップの様子



下染実習



紫根染料液の抽出工程



10回染色後の乾燥

事業取組後の効果

湯通し（生地に染液を浸透易くする作業）、下染め、本染めについて解説を頂きながら技術を指導され、研修生を中心に全員参加で作業を行った。天候の影響で下染め作業継続は困難だったが、次年度の完成を目指していく。研修では紫根の扱い方や染料液の管理、温度変化による染まり方の違いを学ぶことができた。

残された課題・次年度以降の取組

今回の調査では、古代紫根染めの再現に取り組んでいる鹿角紫根染・茜染研究会の関会長から「どのようにしたら90年前と同じ色合いが出せるのか」を媒染剤の「サワフタギ灰」と夏の晴れ間に120回行われる「下染め（先媒染）」に焦点をあてて研究を行ったが、明確なデータがとれず道半ばとなった。次年度以降も手法を変えて90年前の色合いの再現に取り組むこととする。

事例 03 金沢金箔伝統技術保存会 -選定保存技術保存団体-

1-2. 漆芸部門

多くの選定保存技術団体で原材料や道具の入手が困難になりつつあるが、各選定保存技術団体が解決のための情報を共有する機会がない状況のため、この現状を打破するため、各団体が抱える原材料・道具に関する問題を他団体と共に提起・考察することで新たな視点で解決策を見出すことを目標とする。

今年度は、「原材料・道具」をテーマに定め情報交換・共有を実施し、団体間の交流を広げて原材料の確保や活用に繋げる。

-取組- 令和6年度「選定保存技術情報交換事業」実施業務

第一部 オンラインワーキンググループ

「原材料・道具」をテーマにオンライングループワークを行い、選定保存技術保存団体から20団体が参加した。以下の通り各グループからは様々な意見があがり、11月の対面グループワークに繋がる内容となった。

- ・原材料の枯渇や代替品の難しさ、技術継承や資金調達の課題が議論され、保存会の活動を広く認知させる必要性が指摘された。後継者不足の観点から、若手募集にはSNS活用や保存会同士の協力が有効との意見もあり、有意義な話し合いとなった。
- ・各保存会で原材料の入手困難が深刻化しており、檜や杉、楮などの確保が課題となっている。和紙の原料は自家栽培や農家委託で補うが害虫の影響も大きい。道具も職人の減少で製作が難しく、代用品では品質に問題が生じる。後継者育成のため、生活の保障や新たな収入源の確保が求められ、若者の関与とアイデア活用が重要との意見が出た。



オンライングループワークの様子

第二部 対面グループワーク

第一部のオンラインワーキンググループを経て11月に対面によつグループワークを行い、選定保存技術保存団体から22団体が参加した。

- ・技術伝承の課題として、職人の高齢化や分業による負担の偏りが指摘された。材料・道具も、大量注文が難しいと機能しにくく、鍛冶職の廃業が進む中、資材を一元管理する取り組みもある。今後は業界全体で課題を共有し、解決策を模索する場の創設が提案された。仕事量の確保が重要だが、業種によっては増やす手段が限られ、解決策が一樣ではないと再認識された。
- ・働きやすい環境整備や後継者同士の交流が求められた。職人の賃金適正化も課題であり、仕事量と単価の向上が必要との意見が出た。営業努力も重要だが、発注者の仕事増加と単価向上が技術の継承と安定した生業につながると考えられる。



第二部 対面グループワークの様子

事業取組後の効果

【各団体との情報交換によるアンケート結果】
今後情報交換会が開催される場合の参加意向：参加したい 98%

今後の開催方式について、希望するもの：グループワーク・パネルディスカッション 65%

残された課題・次年度以降の取組

今年度事業を経て、グループワーク出た意見およびアンケート結果を元に、次年度以降も引き続き選定保存技術保存団体同士の情報交換会の機会を設けたいと考えている。

阿波藍製造技術保存会 -選定保存技術保存団体-

1-1. 染織部門

伝統的な染織に不可欠な染料、染（すくも）の製造技術である阿波藍製造は、乾燥させたタデアイを細かく刻んで葉と茎に分け、選別した葉に水をかけ発酵させる点に特徴がある。江戸時代後期に名声を不動のものとした阿波藍を保護するため、製造技術の維持向上および伝承者養成を行っている。

本事業では、阿波藍の製造において、藍を発酵させるための切り返しの作業に使用する道具である「ハネ」に重点を置いた。古くから使われていたハネの材料となる「カゴノキ（鹿子の木）」は現在市場に流通しておらず、サクラやケヤキで代替することが多かったが、ハネの板が厚くなり、重く扱いにくいため、作業を行う際の負担が大きいという課題が生じている。昔ながらの軽量のハネを再現するために、カゴノキまたは類似の木材を探し、阿波藍製造を行う技術者である藍師の負担を軽減し、次世代に技術を伝えていくことを本事業の目的とする。

取組① カゴノキ製作事業所への視察

「鹿子の木」の取り扱い業者について調査を行っていたところ、（株）ウッディ・ヒロのホームページにて鹿子の木の取り扱いがあるとの情報を得、先方に問い合わせたところ、購入が可能とのことで依頼を行った。

取り扱っている鹿子の木がハネの製作に適しているかを確認するため、阿波藍製造技術保存会の佐藤好昭氏および保存会事務局が事業所を訪問し、材料の確認を行った。確認の結果、木材の乾燥もできており、ハネを作るための面積も十分だったため、試作を行う際に必要な加工を依頼し木材を購入した。

その際、ハネの柄に使用する木材の種類について相談したところ、和太鼓のバチ等に使われている「朴の木（ホオノキ）」は昔から農具の柄にも使われていると教えられ、佐藤好昭氏にも同意を得られたため、併せて試作に使用する方向で調整を行った。



（株）ウッディ・ヒロ視察

取組② ハネの製作

ハネの製作は、従来依頼していた農具店や建具屋の廃業により困難となっていたが、伊川彫刻店に依頼が可能となり、製作を進めた。鹿子の木製のハネを見本に、板の反りを考慮し1.5cm前後まで薄く加工。試作品を保存会員が確認し改良を加えながら製作を進め、最終的に22本が納品された。

試作品の長さに関しては意見が分かれたため二種類を製作し、完成品は従来のケヤキやサクラの木より軽く扱いやすいと評価された。

今年度は染の製造は終了しており、実際の使用は来年度以降だが、今後の改善点を共有しながら製作を継続する方針である。



カゴノキ製材の様子



保存会会員による成果品の確認

事業取組後の効果

保存会会員の希望する形で昔ながらの木材を使ったハネの完成が叶った。ハネは1～2年で消耗するものではないので、納品されたハネを保存会内で分配しても数年以上は保つことが予想される。鹿子の木自体は、県内での自生が確認されているが、数年後材木としての利用価値があるかはわからないため、今後も代替となる木材の調査を進めていきたい。

残された課題・次年度以降の取組

ハネの製作における懸念として、板を弓なりに薄く加工する技術、ハネ特有の柄の形に木材を加工する技術、それらを負荷がかかっても壊れないように木組みで組み合わせる技術などが挙げられるが、普段彫刻を行っている技術者に製作を依頼することで、複数の課題点に対応してもらうことができ、また用具を製作してもらえ新たな技術者との繋がりができたことも非常に実りのある成果となったため、次年度以降も引き続き連携することとしたい。

琉球藍製造技術保存会 -選定保存技術保存団体-

1-1. 染織部門

古くから沖縄本島北部で主な栽培が行われてきたリュウキュウアイは、本土で栽培されるタデアイとは別種の含藍植物である。収穫した琉球藍の葉を浸水し発酵させ、石灰を加えて攪拌し染料化したものは泥藍と呼ばれ、ペースト状の状態出荷される。この泥藍は県内の伝統染織にとって欠かせない染料であり、紅型や芭蕉布、琉球絣、宮古上布、読谷山花織等、各地の染織産地において藍染めの原料として使用されている。琉球藍（泥藍）の製造技術は、それらの伝統的な染織物を支えるために欠かすことの出来ない技術として、国の選定保存技術の認定を受けており、技術継承が行われている。泥藍の需要は化学染料の普及で衰退し、また近年は台風や水不足の影響もあり、最盛期には数百戸あったと言われる生産農家も1割以下に激減。機械化が難しく手作業中心のため後継者不足も深刻しており、本事業では、果樹農家などに藍葉の栽培を依頼し、生産者数の確保と後継者育成を目指すこととする。

取組① 琉球藍栽培についての説明会

- (1)実施日 2024年9月6日（金）
- (2)会場 伊豆味公民館
- (3)参加者
果樹栽培事業者2名
池原幹人（琉球藍製造技術保存会事務局長）
坂田伸治（琉球藍製造技術保存会会員）

藍葉生産の希望者を募集するために、近隣農家（果樹等）などを対象に栽培のための説明会を実施した。特に伊豆味地区で盛んに栽培されてきたリュウキュウアイだが、現在同地区で専業農家はなく、兼業による小規模栽培が主流。生産量は明治期の1%以下に減少し、農家の高齢化も進んでいる状況である。染料需要は高いが藍葉不足が続き、保存会内でも毎年数トンが不足している。また保存会での藍葉の適正価格は300円/kgとし、市場価格も200～300円/kgで推移している。本説明会では生産者確保と需給改善を目的としていることをお伝えした。

事業取組後の効果

藍葉の生産に適した条件の圃場を持つものの、これまで琉球藍を栽培したことが無かった農家の掘り起こしに成功した。
また事業者からは以下のコメントをいただいた
・果樹栽培との組み合わせ作物として琉球藍を活用したい。
・農業以外の泥藍造りにも興味を持つようになった。

取組② 圃場選定～栽培フォローアップ

【圃場選定】果樹栽培事業者2名の圃場を回り、特に日当たりと台風や寒波等、強風の影響を受けにくいと思われる場所を総合的に考慮し、琉球藍の栽培に適していると思われる場所を選定した。土壌、水はけなどの物理的条件のほか灌水や施肥・除草作業や収穫など、管理のし易い形状で畝立てなどの計画を立てた。

【圃場整備および土づくり】土づくりのための耕耘作業を行うが、雨の影響により実施が予定より約3週間遅れた。舟波氏の圃場では灌水施設の不具合が発生し、汲み上げポンプや貯水タンクを設置。施設補修が間に合わない場合は車両で水を運ぶ対応を取ることとなった。

【栽培フォローアップ】外部講師による植付・栽培指導の後日、各圃場にて遮光対策等の指導、以降の管理方法の指導、作業補助などを行った。



圃場整備および土づくり



栽培フォローアップ

残された課題・次年度以降の取組

栽培した事業者に対して、事業完了後も引き続き補助を行う必要がある。
単に生産者・生産量が増えれば良いといった考えではなく、一緒に伝統文化を守っていこうという共通の意識を得られるよう、保存会の趣旨・目的などを継続して伝えていく必要がある。

宮古芋麻績み保存会 -選定保存技術保存団体-

1-1. 染織部門

宮古芋麻績み保存会は、芋麻（からむし、ブーともいう）の表皮から繊維をとり、手績（てう）みして（繫いで）糸を製作する技術を有している選定保存技術保存団体である。沖縄の宮古諸島では糸績み技術者が栽培から糸の製作まで一貫して行い、重要無形文化財「宮古上布」などの原材料を供給している。本会では宮古諸島各地に伝承されている芋麻の生産および手績み技術の保存に努めている。

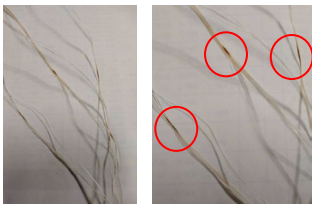
近年、芋麻を収穫した際に、繊維に付着する赤褐色の斑点が多くみられ、績み手は生産に支障をきたしている課題があげられており、このことから、芋麻栽培に関する環境調査や赤褐色の斑点の原因究明のため、外部団体に調査を依頼し本事業で行った。

取組① 芋麻栽培の環境調査

宮古上布の生産振興と芋麻の栽培方法の調査を目的に、宮古島の栽培圃場で環境調査を実施し、土壌・作物体のサンプル採取や聞き取り調査を行った。2024年11月18日～20日に11か所の圃場から土壌を採取し、圃場の作付け面積や照度、株間・草丈の計測も実施した。また、沖縄美ら島財団の試験圃場で鶏糞・牛糞を用いた栽培試験を開始し、2025年1月7日に赤ブーを試験株として定植、3月中旬に第1回目の計測を予定している。

さらに、芋麻に発生する赤斑点の病因解明のため、法政大学植物医科学センターにサンプルを送付し、分析を依頼した。これらの調査を通じて、栽培方法の最適化や病気の

原因特定に取り組み、宮古上布の安定生産を目指している。



繊維に付着する赤褐色の斑点

取組② 第1回芋麻栽培会議・意見交換会

取組①の芋麻栽培の調査の最終日に、宮古島市役所内会議室にて、宮古芋麻績み保存会会長ならびに保存会員の他、一般財団法人沖縄美ら島財団総合研究所植物研究室職員らによる、第1回芋麻栽培会議・意見交換会が行われた。芋麻の栽培環境と赤斑点病の調査を実施し、土壌・作物分析を継続し、天候や施肥状況との関係を検討することとした。赤斑点病の特定には宮古島での調査に加え、法政大学への分析依頼を行った。栽培試験では、鶏糞・牛糞を用いた影響を比較し、今後は収量向上の方法を探る。作物繊維の強度評価や品種特性の調査も予定しており、農家の施肥・収穫情報を共有し、栽培マニュアル作成を目指す。

長期的な研究計画のもと、実証試験を重ね、宮古上布に適した栽培法を確立する。



圃場調査の様子

事業取組後の効果

赤斑点病の調査を行った結果、分離菌株により菌類の一種があることが判明となったが、対策として使用できる農薬がないため、発生初期のうちに被害茎を削除・処分する（燃やす・深い穴に埋め込むなど）などを施行することで、病害の軽減につながるという結果が出た。

残された課題・次年度以降の取組

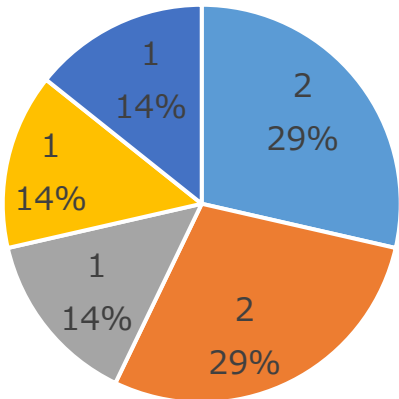
- ・土壌調査の継続的な実施
- ・赤い斑点原因究明のため、各栽培者からのデータ収集を行う
(雨の多さ、採れ具合、裂け具合など、赤い斑点の割合)
- ・施肥量と管理記録を継続的に実施

1. アンケートの実施

1-1. 実施団体向け

本事業の実施団体向けに、事業実施における課題等について、以下アンケートを実施し、効果・分析を行った。

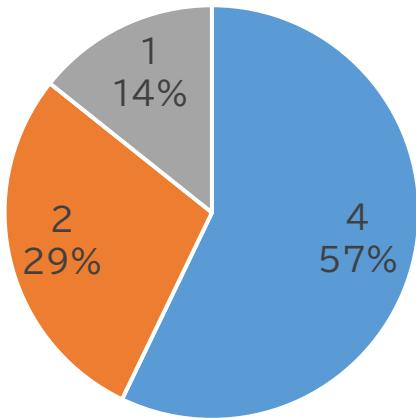
Q1. 本事業内の視察、関係者による会議、用具・原材料に関する調査・研究などを実施する際に、困ったことはありましたか？



回答内容	回答数
視察先や調査先が決まるまでに時間がかかった	2
事業の報告書をまとめるのに苦労した	2
関係者の日程調整が難航した	1
旅費の計算が複雑だった	1
その他 ・分析費用の値段が高い	1

- 視察先や調査先が決まるまでに時間がかかった
- 事業の報告書をまとめるのに苦労した
- 関係者の日程調整が難航した
- 旅費の計算が複雑だった
- その他

Q2. 事業の実施のスケジュールは適切でしたか？



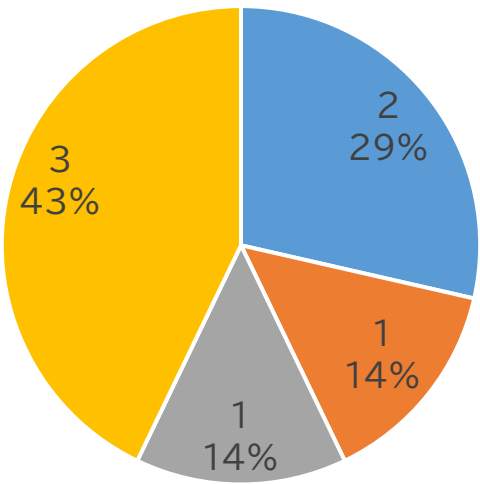
回答内容	回答数
もっと早くから開始したかった	4
もっと長く実施したかった	2
適切だった	1

- もっと早くから開始したかった
- もっと長く実施したかった
- 適切だった

1. アンケートの実施

1-1. 実施団体向け

Q3. 事務局にはどのようなサポート体制を希望しますか？



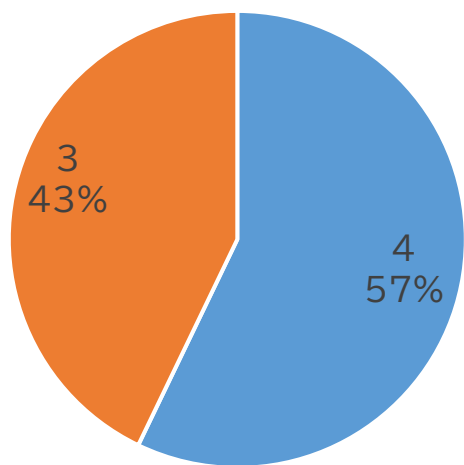
- 定期的に事業の内容を確認し、専門的な指導をしてほしい
- 会議場所の確保、旅費の計算、議事録のまとめなど、会議開催の事務サポートをしてほしい。
- 定期的に支出を状況を確認し、経理についての指導をしてほしい
- その他

回答内容	回答数
定期的に事業の内容を確認し、専門的な指導をしてほしい	2
会議場所の確保、旅費の計算、議事録のまとめなど、会議開催の事務サポートをしてほしい	1
定期的に支出を状況を確認し、経理についての指導をしてほしい	1
その他 ・事業の報告書作成時に必要な事務のサポート	3

1. アンケートの実施

1-1. 実施団体向け

Q4. 今後も本事業を活用したいと思いますか？



- 必要があれば活用したい
- 積極的に活用したい

回答内容	回答数
必要があれば活用したい	4
積極的に活用したい	3

Q5. Q4で回答した内容の理由についてお書き下さい。

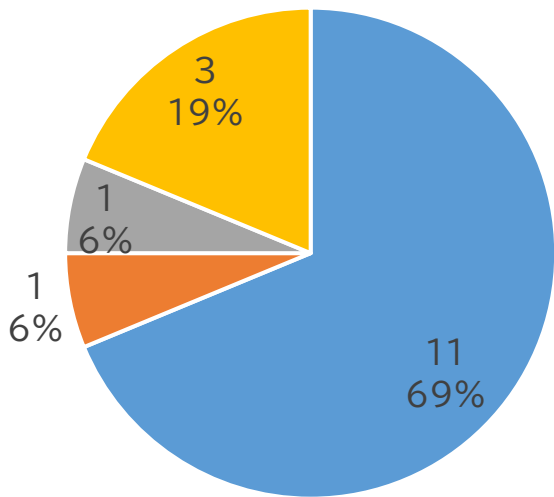
回答内容	回答数
スケジュール調整の面で、事業報告書の作成が年度末にさしかかってしまい、他の業務との兼ね合いが難しい。緊急性のある問題でなければ、とりかかるのに躊躇いがある。	1
より安定した原材料確保を続けていくために会員内で検討して行きたい。	1
今後も用具材料の課題は尽きないと思います。	1
通常の補助事業や自主事業とは別に実施できるので。	1
保存会が課題としている問題について、少しずつですが解決策が見えてきているので、必要があればこの事業を活用していきたいと思います。	1
無形文化財の手業や材料の取り扱いなどは、口伝や伝承によるところが多く、科学的には未解明な部分が多い。次世代に継承させるためには誰もが解る科学的根拠や指標があれば取り組み易くなると思う。その解明のために引き続き取り組んでいきたい。	1

1. アンケートの実施

1-2. 未実施団体向け

次年度以降の取組の参考のため、未実施団体向けにも、以下アンケートを実施し、効果・分析を行った。

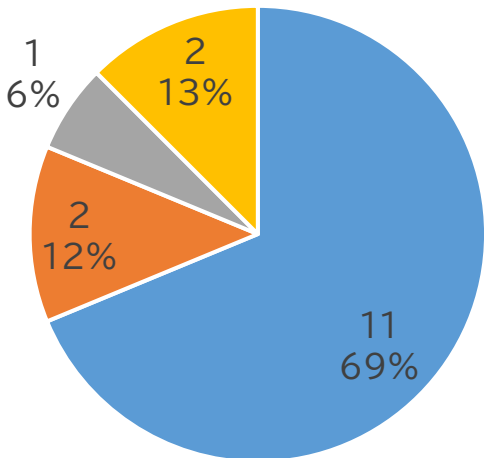
Q1. 今年度、本事業に応募しなかった理由についてご教示下さい。



回答内容	回答数
通常の補助事業の実施で手一杯だから	11
応募したかったが、事務体制に余裕がなかったから	1
用具・原材料に課題を抱えていないから	1
その他 ・募集の連絡を見逃していた 等	3

- 通常の補助事業の実施で手一杯だから
- 応募したかったが、事務体制に余裕がなかったから
- 用具・原材料に課題を抱えていないから
- その他

Q2. 来年度も本事業が継続していたら応募しますか？



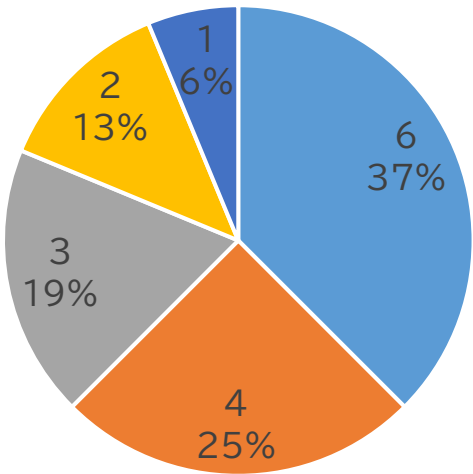
回答内容	回答数
余裕があれば応募したい	11
ぜひ応募したい	2
必要がないので応募しない	1
その他 ・現在行っている伝承団体形成促進事業にて一定の成果が確認できたのち検討の上応募したい 等	2

- 余裕があれば応募したい
- ぜひ応募したい
- 必要がないので応募しない
- その他

1. アンケートの実施

1 - 2. 未実施団体向け

Q3. 無形の技術を保存するために、補助事業以外にどのようなサポートを希望しますか？



回答内容	回答数
補助事業でカバーできない部分を補完する委託事業	6
用具・原材料についてのネットワーク構築	4
通常の補助事業の事務サポート	3
適切な専門家の紹介、派遣、指導	2
その他・用具を作る側へのサポート	1

- 補助事業でカバーできない部分を補完する委託事業
- 用具・原材料についてのネットワーク構築
- 通常の補助事業の事務サポート
- 適切な専門家の紹介、派遣、指導
- その他

その他、本事業について意見がございましたらお書きください（自由記述）

回答内容	回答数
とても使い勝手の良い事業だと思いますが、自治体担当に余裕がなく、これまで応募を見送っています。何とか再来年の事業に応募ができればと考えています。	1
とても良い事業だとは思いますが、事務や調整ができる担当者が少なく、なかなか手が出せない部分があります。また、用具・原材料も含めいろいろな問題が山積しているため、どう手をつけたらいいか迷うところです。そういった部分について相談に乗っていただくところからできればうれしいと感じます。	1
今年度から担当したため、事業に対する知識が不足しており、今後活用できたら活用していきたいと思います。	1
新たにやろうと思えば様々な方向から（いづれ主たる事業の運営に関係していく内容で）事業は起こせるが、それに専属できる人材確保が難しい。人材育成にも大きなサポートが欲しい。	1
日本各地の漆植栽団体との交流、意見交換等を行いたい	1

1. アンケートの調査分析

今年度実施した保持団体・保存団体に関しては、視察先や調査先の選定や日程調整に難航し、かつ最終的な事業報告書をまとめるのに苦労した団体が多く見受けられた。

対して事務局には、"定期的に事業の内容を確認し、専門的な指導をしてほしい"や"事業に必要な事務のサポート"について声があった。

用具・原材料の確保に対する調査研究を実施したことにより、現状の課題の把握ができ、今後、解決していきたいという意向がある団体も見受けられたのは、本事業の成果といえる。

未実施団体については、今年度本事業を応募しなかった理由として、事務体制に余裕がないなどの否定的な意見が多かったものの、今後、事務局体制に関する支援があれば課題解決に向けて取り組みたいという前向きな意見も見受けられた。

2. 今後に向けて

本事業を通して、実施団体および未実施団体の課題や今後の展望について見える化したことで、実質的な事務体制の強化につながる支援が必要といえる。

具体的には、意見交換における議事録の作成や、旅費精算・視察日程調整・オンライン交流会・記録作成・実施報告書・精算書類作成等における事務サポートを行い、当該の用具・原材料、ひいては技そのものの保存・継承をしていく必要がある。

【付記】

本成果とりまとめは、調査・研究においての記録写真、議事録・報告書を元にまとめたものであり、内容については各団体の許可を得て公開した。